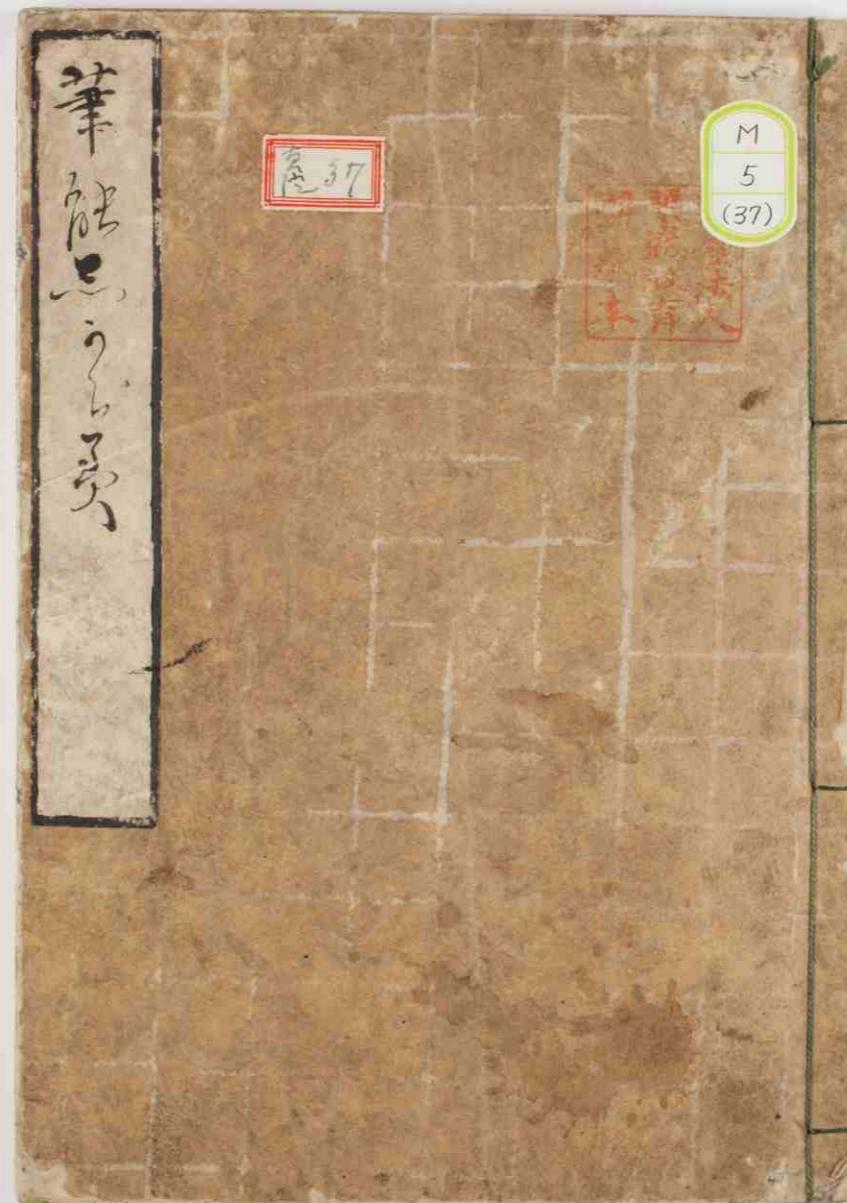
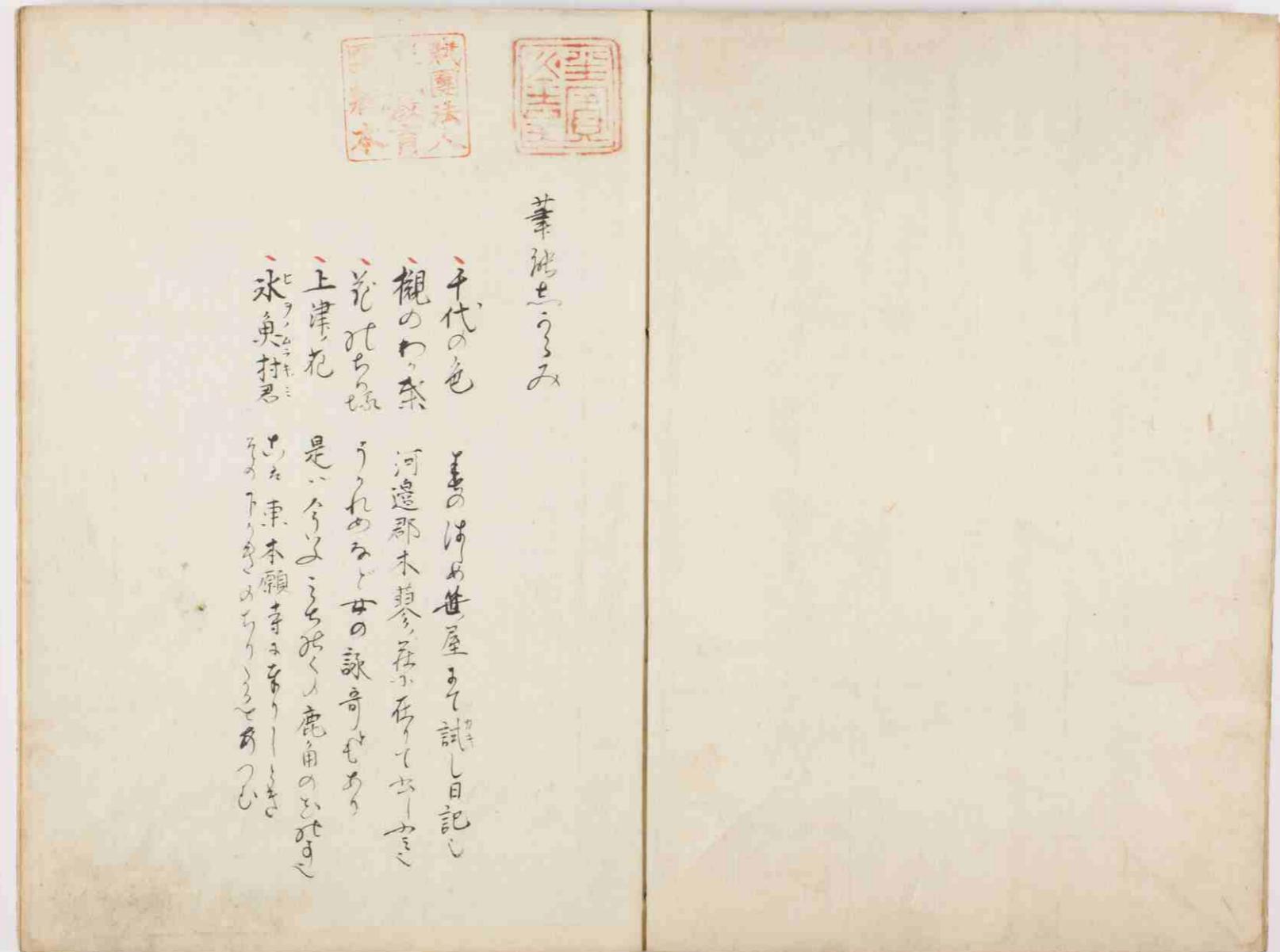


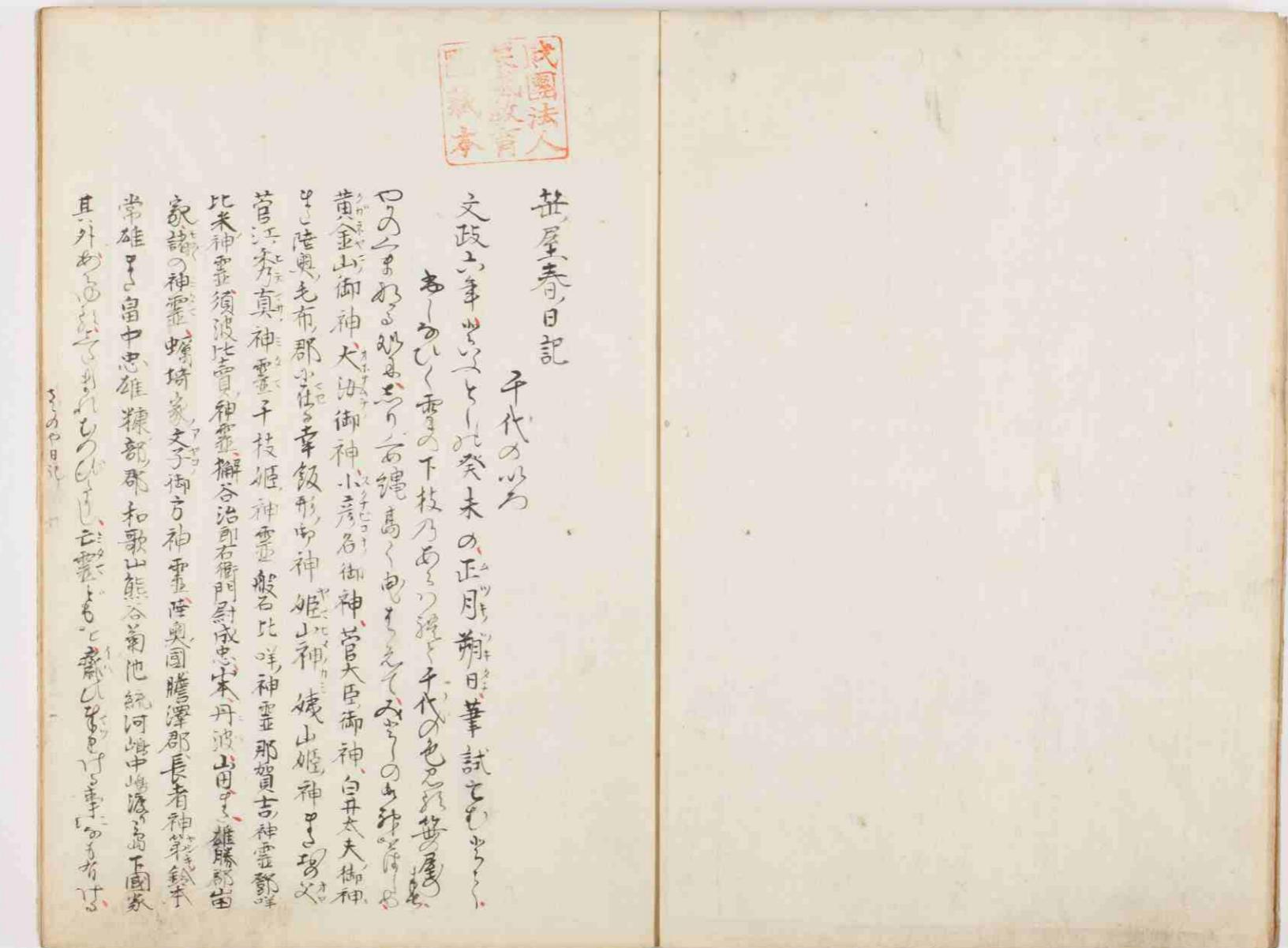
破損あり

以下 汚れあり





破損あり



生のをとむる三河尾張のわざとあづか。

ありひれ今朝すと鳥小鳴浜よニ恩の道と寄せられ
二日の日太鷦鷯と酒と鮑を差下さしつかへておもひ
筆をとりて筆の筆づく

あら里すいがすと雪の花はなにあらむとしむけ
三日、在原寺の是觀上人、小野守民、千穂屋、進藤氏、
多引家とありてよりの餘されしれんに見まよて作り
杯を酒すとあらむとある。やく。

三の屋まくらをすと誰もさへ千代の齡ひすとくす

四日、生もろ歳のつみをうつと遣う御をふ

時鐘トキツイ生もろ歳とあはきの民とてあらもくさり、

五日、さかだ童の鶯笛すと吹きましゆもとさくら風吹く

花室の梅を笑ひてうやひまのえう辭をさうへめてほじ
六日、子日、冊子日、水ひゆうとみきる引馬岐、遠江國濱赤、畢
のありひれと三河のあうち、吉田豊川の流あと遊濱遠御馬跡前、
葉をと大波あり、今を村かず、留とうれそこかく、浦をうらむと
えひ遠江人とものあらひへげの事あることなりひあく、

嘗のものもれい松をしませどひそばすをとひへとぞれ
七日、うそやせもれもあれゆも、口うまも、うそとぞれひつこじ
とかの父母ふるのとまつりを無ひれど、

かひ遠江人へとまつりをあひつてあらの事とつまし
八日、さあひ古四王、宮のちーみがれ、夜経よりくさくまわらひしと
うれうめあうるくも、うそとぞれまの正解マサハタとてくわくわく
初の雪の雪かきをゆきのまじて、雪の高志のあらきみのさり、

九日、雨季アメフリで、天氣も寒並且て、冷えり事のて、樹上のみ
の葉もれり、うが

風吹ける小石やもく篭屋にうちりて、其處を

十日、雨ヨリありて、と、寒し。

毎日の朝端のまみ檜弓ももと一とくものあれ
十一日帳とら籠かきて、儀子祝す高人の物もと、田畠舖、
民草のとねりけむの屋戸もと、小殿章と祝すもの
をもふぞうて、うとうと、朝こちあはれ、賜ひ矢つづきあはれ
十二日大山神祭。やまと木代ノ祭ノ口が、雪の山にして、其の手附
あはれのむこうひありとゆし

社人のとの小みて、うとうと、ああそし、と、の山ロ
十三日、柿の節とて、うほの柳を、うほ折りて、うほあはれ

十四日、風吹き、ちひりて、柿の枝、枝葉もはう、うそも、かえ様。
高くひき、されど、柿葉も壁へ、アラ、重慶玉もあらずて、あはれ
十五日、うそふらと、うそも、柿の枝、枝葉も、つるぬれり、
世後ちち、うそも、あはれ、あはれ、うそも、あはれ、
城内坊玉也、鎌倉祭を、あはれ、うそも、あはれ、
小田の形、うそも、うそも、立あはれ、うそも、あはれ、
鋪倉大明神、あはれ、佐喜長らの紙幡を、あはれ、室張の敷を
うそも、うそも、うそも、うそも、うそも、うそも、うそも、
うそも、うそも、うそも、うそも、うそも、うそも、
お事も、うそも、うそも、うそも、うそも、うそも、
民家く松用刈る、鎌倉の燎や、やくせ明れ、木代

十五日、坐をさむ御祭余とまづわき田方より新島帽子大段からまへて、
その神の下わる。神祇カミヨウをあひくしよ大祓棒オハシヤとその大きさをも
らう者多くありもみれかざりて、里ノ神シロノジン。こぢりこゑうちひ
あせ、そぞりつ井輿イヌヒの上半カミハもあくの品とめをあらすまを取
てハツあるも十あまりもあらまを町の頭シロヘすまつてまひ向シマヒマツのうほくま
き童シロヘをまろ浅葱シロヘの頭巾タケハタ。うぶをりて華座カサ事カトと一とを大雪
を世事シロヘをばげ、久保田クモダかとみよまつまの神余カミナリて、寺城スイジをあがしが
お例シロヘとれり、附シロヘそと布シロヘの頭巾タケハタすまをまづみうけ、まくらのまゝまち
牛糞シロヘの内シロヘ大祓オハシヤ棒ヤハシとらうりて、まよまの神のみよまつ内シロヘ大雪
雄元シロヘとわは作シロヘてあらも地火林シロヘ火林シロヘ大祓オハシヤ棒ヤハシとあら
紅シロヘよ彩シロヘるのまゝ、その作シロヘてあら、幡裏シロヘの稻穗シロヘ帶ヤハシ小つて、あらがおれ
稻田シロヘ八束足シロヘ穂シロヘ只シロヘ拂シロヘ事カトと壁シロヘ書シロヘし、まよまを拂シロヘ木シロヘ拂シロヘ木シロヘ

「そあらの是シロヘで御城シロヘのゆりも殿シロヘの板シロヘとみ縫シロヘして、
由シロヘ祝シロヘ小是シロヘ館シロヘの西壽命シロヘ万シロヘ億シロヘ數シロヘをだ、若君様シロヘ御姫様シロヘ
十三人シロヘ孺彦シロヘや若シロヘこづらシロヘよ、まご成シロヘ立シロヘ陽シロヘ七シロヘ四方シロヘの角シロヘがく鏡シロヘ
こよも浦シロヘやうしんシロヘとよあらとおけシロヘて、唱シロヘひくとせうシロヘうすくと
うとつシロヘとおけらシロヘて、あれかシロヘゆ抜シロヘあり、とお前シロヘまシロヘ福出シロヘふく出シロヘ一日、
五六、オはうシロヘは太シロヘキシロヘあとけづりシロヘて、みよこシロヘきよひシロヘ三方シロヘ寛シロヘひんシロヘくとおまえシロヘ
のかこシロヘうて、是シロヘも、まことシロヘを、どのは、めぬとシロヘ、これとシロヘりうシロヘとおまえシロヘ、
又追シロヘめシロヘて、シロヘよ一度シロヘの、由シロヘ祝シロヘ三シロヘ度シロヘす慶シロヘ生シロヘまシロヘうちシロヘ、そくシロヘ出シロヘ
てろよと大シロヘなシロヘいとシロヘ、せと突シロヘあらシロヘくとシロヘ、福山シロヘ下シロヘまシロヘ御祓シロヘ棒ヤハシと
お御シロヘ、名れの御木シロヘと、根シロヘおもとシロヘ沖シロヘ雨シロヘと、信濃國シロヘと、意シロヘ向シロヘと、
うねシロヘばシロヘめシロヘ作シロヘ引シロヘ二シロヘそシロヘの魚シロヘ入シロヘ雷シロヘ剣ヤハシと、あらとシロヘ物シロヘく見シロヘ
初嫁シロヘうきしシロヘまシロヘがす冊子シロヘ、小シロヘセシロヘけすシロヘるの林シロヘも、めうとシロヘとあらとシロヘまえシロヘ

うそふせうけあるともうひじともべかへ、とこうくも、そのう
ロキシ、とまことれ、おが、まち、秋田す、やを棒、捷足棒も、ひま
、木本金松の、穂足の、瑞林も、つみ秋田の、あめ、かうじ
二日、甚石寺は、是觀上人、詣ひ給ひ、十五日の、義小、松の切垣す、身、上
大長、萬羽色、うきこむ、十五日、居あひ、木本、待人、三うぞうす、ま、
鷹を、ゆりあり、と見す、そめ、あ葉、と、せ、
の、あき見、義の、齊、あく、言の、義、と、うみす、あく、
難理、雷禮、と、う、え、あ、か、い、と、す、め、此、二首、と、よ、も、し、と、
う、ひ、稀、く、か、ど、あ、け、と、せ、の、と、母、知、旅、御、都、岐、途、と、学、え、あ、す、
一、鏡子の、う、ま、旅、五日、各、雨、ま、ほ、と、あ、と、あ、ま、け、り、あ、
大、ち、う、う、せ、ぬ、稚、わ、と、木、浪、斯、集、ハ、子、と、せ、ね、木、あ、居、ま、し、
然、長、圓、弓、の、志、木、萬、金、駒、極、家、の、山、わ、し、と、あ、め、を、し

安
而、あみの、柄、花、毛、も、喰、も、差、不、ま、の、袖、蓋、さ、う、し
仰、か、う、よ、か、よ、は、や、か、と、れ、る、ぬ、も、差、不、ま、の、袖、を、多、つ、
朝、つ、あ、も、と、て、ま、宿、の、屋、山、も、う、り、あ、木、奥、主、數、を、
波、君、す、と、そ、と、井、ふ、せ、や、は、は、は、と、き、さ、れ、多、く、と、う、
連、さ、ま、の、君、由、代、と、く、と、馬、の、隠、者、の、鷹、を、馴、れ、と、久、古
十七日、中、城、坊、海、津、館、下、分、捕、高、名、と、事、あ、り、夜、寝、平、小、餅、極、で、
あ、實、小、人、と、其、家、金、事、を、善、我、餅、と、作、と、誰、れ、あ、り、ひ、今、て、是、て、景
進、の、か、く、と、後、大、か、る、聲、こ、さ、り、う、と、れ、と、焚、火、あ、い、う、と、手、す、被、う、と、
餅、一、手、と、入、食、と、う、の、粒、小、豆、そ、う、ち、け、厚、板、の、蓋、う、り、わ、ひ、太、
漫、ゆ、い、太、經、と、叶、て、極、の、る、が、其、上、と、勝、が、居、り、や、ご、と、の、網、す、る、
若、旗、斎、雷、劍、木、金、事、と、う、ち、仰、が、と、だ、多、く、ひ、ふ、け、と、せ、く、仰、
の、う、の、若、無、お、餓、と、う、と、説、を、味、引、て、わ、ら、う、と、さ、う、と、是、と、金、

をとつてひがくで時うれ、夕あけに夕景あまらす、あわてても壁
あそびするらむ。まじめにりせもひやくのゆきがみやく。みだら
獨りはてに寄り、懐樂^{いだか}。ひらけ、夜鼓かみゆくら、雷^{いかづ}のあく、も
椎^シの雄^ハ。小地^ハか捕^ハの例の詳^ハ捕事^ハ、雨^ハありす。しとく

桜弓^ハ。春四月とひゆ、詠^ハ舞^ハ、饌^ハ腰^ハ引^ハ。

六日、子のさん人麿^ハ御神^モ。日あれどもよし。

あり浦^ハ、まもろけを給^ハ。すの間^ハ、舟^ハあるき、五のまつ。

廿五日、吉神の日。前手さく。

東風吹^ハとす。雪^ハ積^ハ枝^ハ。雪^ハのとくね^ハうけても雪^ハ

三十日、冬をじつまく。雪^ハをのる。あはれと雁^ハあもとあーと。

去年^ハ冬^ハとおやどす。まくまく、おのづこす。旅^ハのり。

さくらの花^ハ、まくらの花^ハ。梅^ハ、引^ハ。雪^ハ、當^ハ。雪^ハ、あらわせ^ハ
あらわせ^ハ。うれ^ハ、とくらす。ひのひの、雪^ハ、晴^ハ。

うるのせ^ハ、柳^ハ。折枝^トうるのせ^ハ。ゆめ^ハ、寒^ハ。一^ハゆくひとの袖^ハ
前^ハ。ゆき^ハ、露^ハ。基^ハ。すのの、ひづひと。言^ハ名^ハ。ありそを。寶^ハ目^ハ。あく^ハ
お葉^ハ。とも^ハ。お^ハ。と。小^ハ満^ハ。尚^ハ。き。拂^ハ。うわの。お葉^ハ。根^ハ。ふ。み。お^ハ
おのう。お^ハ。お^ハ。お^ハ。お^ハ。貝津^ハ。雪^ハ。君^ハ。小^ハ鹿^ハ。木^ハ。長^ハ。用^ハ
五^ハ日^ハ。お^ハ。雪^ハ。お^ハ。雪^ハ。見^ハ順^ハ。平^ハ羽^ト。とく^ハ。第^ハ二^ト。琳^ハ。翁^ハ。
みかひの。お^ハ。三^ト。春^ハ。村井東洋^ト。と^ハ馬^ハ。くも^ト。坐^ハ馬^ハ。日^ハ。七本^ハ
鍼^ハ。と^ハ。人^ハ。と^ハ。病^ハ。小^ハ中^ハ。の。あら^ハ。宿^ハ。お^ハ。宿^ハ。快^ハ。憶^ハ。名^ハ。詔^ハ。と^ハ。
今^ハ。村井流世^ハ。お^ハ。ま^ハ。衣^ハ。闇^ハ。御^ハ。休^ハ。す^ハ。表^ハ。闇^ハ。伊^ハ。都^ハ。岐^ハ。老^ハ。くも^ハ。
其^ハ名^{高^ハ}。今^ハ。江^ハ。原^ハ。在^ハ。す。近^ハ。こ^ハ。と^ハ。候^ハ。と^ハ。わざ^ハ。岐^ハ。那^ハ。ま^ハ。藥^ハ
お^ハ。と^ハ。細末^ハ。お^ハ。とく^ハ。癒^ハ。光^ハ。と^ハ。透^ハ。の。房^ハ。う。愈^ハ。と^ハ。奇^ハ。南^ハ。す。の。木^ハ

はうてま價一斤銀子三百零三、いわくあらえうきの間を
見れば大書物の似たりとて、扇の町ある中本氏の、さう居候
うちとて、雪脚一袋贈られぬ。

うちとてことりひぢりをもあらやうのあらむし
六日亥未初年日してあ一多のま誰が筋を本修じて事せざる
ゆゑもにはその某本稿者のゆゑの俗にさへもきゆれき
集のま五十冊ありの書をなす。されどわづかずある
見と尺一寸とぞ事と葉のゆく書あつてもよしとほりし
人の多ああきああれまよちりとも強りともかくりりせん
ある書生があと、園の明徳館を立ちあせよば後の世よかまある
もの考ひしもの一つもうり歌ひとせらすかねどものうち假は
きとあへきとみうき事の多れべ人の足あむ事もあらぬ

秋もうけれぐ今作よすげんひりうめりうじ、文政五年春正月

あ書目勝地臨毫出羽 桐田郡三卷川邊郡毛二毛三毛圖の三毛羽部
恩荷能春風 四方鹿鈴風 雄鹿秋風 小鹿寒風 牛鹿山風
比表能年良君 貢修辭賀良美 鹿毛月里風 小町の寒風
あくの波 油の箇道 あげた出来 五々のあひ 日のあひ
吹きす山風 阿は海風 云のあひ 鷺夷都毛のまき
初のあひ 初のあひ 津輕都毛のまきのあひ 毛夷都
濱風 錦の毛風 雪み毛く多のまほく南部都 いはむのまほく
かくのう風く おの毛く おの毛く牧のまれ 牧の野馬 まほく毛く北
十曲湖 信濃都ワララの東日路 穂の中道 そよおき
百日圖 おはまのまほくおのせんじらく久加貝社 まほく毛く北

山あきの毛く毛くのまくとくこまくとくの毛く毛く毛く

七日人を埋火の毛ち子居てひつやまの主領の下の中より久保の河後郷の因に九郎其衛勤町と足輕あり。ゆき名を慶長二年大坂九郎其衛とす。主の組手のとある事と置れり。しらすはて今そろむやち一多。

煙火の處

十日是觀上人湛照上人とす。五金盛正五郎とす。あさのあさのとす。伊勢貞盛が寶永のころうちしき。転橋又元信が画し七賢人などある。語り合ひ。

十一日肥前國左賀郡の人を旭祭とす。アサヒ祭の事でかくあれ。その國の事やうす。舉都比咩大明神、湯原山ノ大御神社やくちよしき。神領も二百解あり。御年は因小なり。そじゆき。水神祭と櫻盛り。三月のさくらす。かくす。十五日。さくらす。日には家。水神祭と

高木と圓座のと組て。それを兵庫四とひて。主の神供を盛り。梅子を拂り山を。山聲及甚房の美。皇室御用。体。色。形。香。味。皆。良。家。と。う。ま。く。金。川。流。火。と。樹。木。あ。ら。も。う。と。あ。ひ。ち。と。正。月。吉。丸。の。お。ち。起。出。て。本。舟。舟。の。け。ち。め。も。く。と。本。モ。内。小。さ。く。と。つ。ひ。の。ま。で。そ。そ。舟。舟。と。せ。船。船。ひ。て。これ。と。門。と。ふ。ま。て。焚。燒。祭。祭。の。あ。ら。わ。い。と。そ。そ。辛。神。不。備。と。う。船。船。を。出。水。水。を。海。セ。戸。の。大。お。あ。う。と。水。無。月。瓶。萬。國。主。を。あ。れ。せ。ら。づ。も。の。と。え。う。び。と。此。七。日。小。豆。節。を。事。見。そ。舟。の。纏。と。う。て。門。の。夜。窓。垣。根。を。と。小。さ。く。と。あ。と。う。と。三。月。三。日。水。あり。う。ま。馬。柵。内。馬。と。う。と。ね。も。麥。角。と。水。井。と。草。の。ど。と。地。む。ま。う。れ。も。細。ま。る。が。事。み。ぬ。と。そ。慶。安。を。ま。え。ま。る。如。今。髪。伸。と。と。と。拂。お。頭。と。作。と。柳。の。枝。と。涼。て。川。み。渡。を。わ。る。堅。か。と。家。神。の。あ。と。か。お。も。か。し。と。か。と。と。八。月。稻。の。祝。ひ。ま。よ。げ。な。重。箱。の。四。

すゞめのものと一品をうひゆる。四邊の外へもくらべ
 おれでぬうれ家裏の御陣もあてえまれぬか中を入れ生む蛇を
 そむけぬて、りをほく是ど、うをありと、そくつてはと圓のくわい
 ひに歎すまき、寝せむ、山並みと帰盛り、うて男も三十歳半にて、皆、皆、
 嫁入りのと記賀子のとをまづ稻穀をくぼひづて、城の御本のぬうを
 地の姫の妻をひたす、處え嫁の社もろともねらひて、娘を因縁のよし
 要を行事、うきもとうひの月のうれ、正月と櫻の碑うらうらうす
 後ま火をかき通、坂を谷中のすこへ縁を婚姻せでやされど、その家
 生をとあひじよ、うれ、嫁をねとおほくとあとがくす。

九日、雪をくさりあをと、ばおを花をうつ咲院へ、一と夜遠行をひせす、真
 の路經を典河を渡、小吉田の長屋は上を越す了被岸後手を折り
 人をもむかう、はづくとれよりて、橋の上よりの面と吹きむなは

事ありとぞ思ひ出ぬ國のあらう、小吉田おはれとおひうちぬ

は郷ちゆうある雪をひ花ひ、多き里の春をひ、一と夜
 十七日、雪も下正月舞とし、事もぬかくと純真れ、臘明の音小會
 あひ、其兼題うみ、かと考え、うけを向易、御外遊録、欲別
 佐保殿の義ひ、後ひ、水素のそくすかひくとくゆ
 そくそくつまぬ初イモた後、國の元下さへとまづれ
 十八日、えうらううだりたれ鳥もれり、
 康をらうあ鳥が、初年夕を三ツ、四ツ二ツ一鳥のうじて
 十九日、拂曉ちよ、轟きの山がくしと、名く、是をね、
 夏のひの花を、花を、うづきあひ、おもとわく、うだる
 二十日、のめの中西正高のとじあひ、こううう、遷宮の御みを寄り
 あれ、是をうつて、うしきを、飯のと、豚の血を、詰り、中、網代權太夫弘訓

12/31

詞小車とあるのであるを世ふと申せば古きどよき證ゆる體某いとく多
うのあらでうき山口を一巻、二巻、三巻、四巻と申すと説の段正高ノ物アリ
御寒を一毛も絞よめぬ氷やいはうるの形えども其の主はし得む
と雪成さけいからひはかんく不得石をとの命へタケノ花崗山と
づるをと嘆が極る氣のとて聞る邊は不自由の山をうどむ
其日土屋琴齋小應佐幸湛然上人武藤盛連石田道翁とある者を
仰とうと其盡とあらと拂アトメてまつりのソルベキ。

其のそれよりのものに盆の物をうそりうそ見多
廿日大篠の移山數多人の事を去のち前高の善寺寺にて家一人此
の名を一方さくとシテひままでこゝにいた園をめぐらすをやうす。
廿五日夜湯野の菅神の事終小伊藤鶴齋の書、なほの画も額にす
賤シヨシナシ院へ地に玉づつてまことにその額をうそのか

麻佐子の筆

いくちとせねと梅の葉れ色と印を樂しみをうそとも
廿六日秋山の紅葉アリてあづけの身小毛毛て虫のとく
多くれて衣のうるさくとくぬるぬる。

夜川河へとゆく浦のえをみてとくとく身の身みぢみも
廿七日由理郡、豊國郡のとおづか山峯湖、山間の水を蓄
郷より二三里禁めし女眞木の樹、桂木もや道にうすら見
名樂のやうかる地ふ在り其夢房の山もまた廣々二年間に亘り石を
水の色、らぎはれの如く中央の小島あり此島の老松一本あつた
咲嶋西小島のそと見れず、東洋を望むたれば、南を流れるむ、七八年
月がしむ、老松の木つゆの涙をきよるを今に記す。其の處まをひ附て唯
の音響するとあやの声にあがれ其の小太蛇すまの山を美すが事。

あつて此をちこち重ね定時かく下君川に舊いさうき
はまちうしゆの男あり。かくとて城を訪ね、此處を峯湖の山神が
そぞろ見ゆる處の出で壁といふ者あり。君川村を越むる處で
壁を今國をもととす。即ち此をりびじれば伊良田の山中を西高
麗寺へゆる處也。さうしてはやく年子あれどもよ
くす。とくとくとて、うとう睡もじ。駿河國をもと今も多有。
強也。うちばれとせ牛郎の大沼をいつまほれらるる者あり。其外をまよ
う。御田郡防に下田比良大同馬神足。佐安彦沼をもととて
小堵のうねあつくとく多くはるゝ。
其、とくとくとて、うとう睡もじ。おとおとくあくまで
あくまう御みととくとてゐる。

おじよおのじよとみてうもの積りにて見えまし

三月三日夕方つよひとあさの中より月のあらん紙をくわひま
ゆふるうらうと入ぬ

後船の色不醉うる三日月の坏トロスニとくまゆくぐくは

四日朝さきをりのせくをもとす小島と人のまて酒の世裏にて其
じはやきがすかんとす。其の里には城秋田まで十二所南北侍
庵町と慈佐藤左門と云ふ家の傍をまづと掛橋あり。そのとす。
どう古うす様ありが、一重のうをほそくらと八十八夜のあゆみ満て
うちあるを掛橋のもうとす。家内舟もうら並ぶ。しまと大阿仁家
小様櫻。小淵村小枝郷の水無村の北、三前への河下の在り。櫻も
一重のうをとせんとて南隣の佐藤橋も、平野を卑タカとて、とて多くよ
ゆしき橋もありけれど北門大館の序町橋大うち古本多序町と
うまの町の中村新太郎と云ふの處を生ひうかとあり早急

寄ト大館、三ツ咲櫻堂アリ。ものと古内今右衛門、古内織部
近藤七之丞、中村權右衛門、^{サモラ}の鑑の後もさう。
萬葉櫻セキシトシガウシの御のうえとくもせば、此花久保の
山のものともさへおもふとて、まと宗福寺の白練衛門とを
いふ。めりしき、火の木ねむる、兼應寺の垂枝櫻一本を古木もしま
一木を以龜禪門がうなげと爲し、しかも花の頃、枝も叶もとくら
きよ、よのの雨す程也無すあり。手を機ひて書かづけたまうつ
南比内大菖蒲の雨景、燒櫻、^{サクヤク}花大菖蒲の稻荷御社の前まことに大あら。は
その花も重の紅のうをち様、片枝、^{ハナテ}をうだして花咲き、片枝
季きく花のと多、地ニ股枝のみ多くかへて、田實豐景
ひやう、花のとくわざと秋田よかとどよりゆとあひども、金山櫻
あひ世を萬金山の水代庵のひばりく、ハマスミレ紅葉の風のあ
みれんつけの今雄、あくまほほの様にあふとあらすみ

花大菖蒲のひやうをく見つけられがれとす。花もせぬとく、ま
寄生櫻、太菖蒲の枝脚、森合の九郎坂の下つゝ小大なる桂の本家
あひく桂の本社の下ばかり、小大なる桂のせぢり一もあり。桂、四月の
始まはまのこすむらさき山櫻、雄勝峠の大櫻、^{タチ}と仙北金源古城
在し、勝膳櫻も名まへれり。名し、雄鹿浦水口の旭筆とよまし。西
箭、男鹿の相馬水^{さき}村奥^{さき}谷^{たに}古村通者不動院^{ふどう}寺の頭角
まき石碑よりと帶のとく石橋の如^シ。そのうそまく石井上^{アシ}
金櫻のむじひが旭ひひましもあらうとまき。象印推夫もく跡りて
吉^{ヨシ}を傳ひて下りひやせり。一を洪流のあふる有根うちをひづて
倒れ声を枯らす。ちーもべきをあはれ。一をあへて、稻田郡新城墨
澤櫻、花も含みて、寛平三年堀河大臣昭宣云萬葉絵し
やれんつけの今雄、あくまほほの様にあふとあらすみ

そのまゝ寝てと諭め一ひまくもは花の色黒く壁りて、す。地新域
石田坂村外高倉山龍泉寺、大同二年坂上將軍田村麻呂建立者
仁壽のころ圓仁大德開眼の徳大勢至菩薩ハ御佛にて、行基
僧正作觀世音圓仁作地藏大士とアセリ。鐘方外方有寶物
不るひこべ假面あり、裏奉造立龍山寺舞樂面也。德治二年三月と
御深心とぞぬるをの布目の上手か。他山を安東山の家にへてま
着第小あらうとあらぬ地あり。墨澤僊然の古跡跡ふ生ひあらう。
天正のころのむ。潮越佐七某の古城跡もあり。山田坂下を走る老母川云
其ノ事は深得をよ。花をひそれ白模そとぞれ心もよく墨の色を
そりあらむ。此のかけくゆれが親のものか。アリしものと云ふを
墨もの傷やくせうと角もととあやびとあるやうづつと云ふ。
名うを嘗て。あも大なりしが。惡僧が。うふふと笑ひて。かくきぬる。

其小中とゆきをうとありけり。衣服令。眾人奴婢。様墨陳と定め
られ。す。今ま花色小供のとくにゆきを。かむの。峯雄の頃。
うれど。被覆小在し墨澤も。うて。あも。猶。う。う。極。中。い。と。
か。も。今。ゆ。し。お。され。若。ひ。う。詩。を。お。ほ。よ。わ。ゆ。う。み。く。日。記。
知。財。初。辛。中。尊。寺。ま。す。了。忍。利。寺。主。并。慶。櫻。と。武。藏。塔。と。通。
薄。墨。櫻。と。不。あ。り。聞。て。人。不。え。い。其。櫻。を。近。見。す。桔。子。と。
以。之。を。入。く。す。と。萬。高。館。の。舊。跡。不。存。矣。而。義。經。堂。被。つ。く。當。堂。
華。の。隣。寺。の。二。卷。す。も。す。こ。う。墨。澤。後。あ。ど。石。室。内。も。事。ま。と。
も。す。も。あ。う。と。か。れ。今。も。ソ。う。こ。う。墨。澤。後。あ。ど。石。室。内。も。事。ま。と。
六。月。二。下。午。下。午。七。日。午。神。變。太。菩。薩。金。身。ア。ミ。テ。シ。ア。ヒ。ア。吉。山。
隱。士。北。陽。法。印。世。假。行。者。の。木。像。セ。寄。附。セ。ア。ヒ。ア。北。陽。役。談。十。議。
ア。ヒ。ア。う。も。く。志。一。百。五。キ。ア。ヒ。ア。今。の。世。け。北。陽。セ。ア。ヒ。

16/31

八日二十六日丁酉三四人うちもさ子よもりをと外まくちやく
あふれとあがく、うそ土筆いとまひすとひとひとひとひとひと
やめあうとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと

九日二十六日書の圓の窓近く船とす船りけりとらしをす
あきら花と玉向と

おとせもすとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ
せとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ
花とせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ

せとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ

廿四日夕と夜と朝と午と申じ事一物候あり、秋田郡神足
御堀内村小古城跡あり、じの城主と、城内與三郎某と、其信周

で董地與三郎と、今かみひと、此村を在り、鶴下村、濱田与平門尉某
と、濱田本之助某と、云ひあり、織田信雄と、真坂筋と、配備サツビと、
竹君小毛と、び来り出戸、天守閣の三重と、大漢門と、御門と、御門と、
鷹と北野の山神と、彦根をもと、神社と、佐和と、信雄の金持と、
信雄云飯沼の後も、多く出勤する事と、本日、三月廿日、出戸の菅神と、本居と、
天神宮の神剣と、神足店の村と、出戸の菅神と、本居と、
本居と、廿四日夕と夜と、家と、火と、出勤する事と、五日も、出勤と、
出勤と、山神と、山の花と、出勤と、五日、菖蒲と、五日と、
菖蒲の供御と、よみがえりと、いはると、かわらと、をもと、あらわし
かわらじと、山吹と、吹きあつれ、誰か若もぬりてかくと、便りと、
それと、もうかはと、新しくおひと、あれ、新の山振と、

下巻を書し事あり、そこれより小切きつぎて、廣野ヒロノやヒロと名づく
をことど、菅神イシキニシを祭りし社ある。之に太久保の驛エカツブ小隣コウリして新闢シンケントす
村あり、一村三里ミリ。菅原氏イガハラもそのあたりを守ることあつた。かくもれと曰う
或人呼名サツメイの遠流アソボの事サツメイと云ふ。是れを
よみのあれの生マサニ本郡ヒラタケ郡ヒラタケ舊郡ヒラタケ地ヒラタケを真坂マサニと云ふ。あれと正阪マサニの名を
村の枝ハラ寄シテ、秋田郡ヒカルより、郡邑記云、真坂村境マサニ本郡天瀬川アツセ川界ヒヤウ。三
倉岬マツシマ山岸分ヒラシマ、松森岸分マツモトシマ大基オオシマ山岸分ヒラシマ長根保ナガネボ五輪坂ゴリバンで同郡市壁
村を真坂村境マサニ五倫坂ゴリバン長根保ナガネボの大澤オオシマ上平カミヒラを峯カミヒラからと見て、そぞ花
天安アスカニ、秋田郡ヒカルより、本郡ヒラタケとあり。年ハサカとさとくとも今多山本郡天瀬川
村の序ヒラタケ山地ヒラタケのヒラタケとばとヒラタケとばとヒラタケ、烟スモの家スモあり、そこそじ内大臣信雄公サムライ遠
瀬ヒラタケのヒラタケとばとヒラタケとばとヒラタケ旅館リョクカンと遠ヒラタケせはを給ヒラタケ跡ヒラタケと地爐ヒラタケのヒラタケあり。又ヒラタケ火ヒラタケのヒラタケ後ヒラタケ、
余ヒラタケのヒラタケとばとヒラタケとばとヒラタケも出ヒラタケけれど、村民ヒラタケ小石ヒラタケを積ヒラタケ上ヒラタケて甚ヒラタケむとせり。

久くヒラタケて、自留佃ヒラタケりとつりて、種ヒラタケめさうヒラタケと石ヒラタケ積ヒラタケ一塙ヒラタケ
うちもヒラタケ炭櫃ヒラタケありとヒラタケとヒラタケ信確ヒラタケ公ヒラタケ自留ヒラタケ人ヒラタケ系記ヒラタケ事ヒラタケ、
革ヒラタケのヒラタケあとヒラタケつヒラタケ、野ヒラタケいとヒラタケふとヒラタケ精ヒラタケすヒラタケひヒラタケりヒラタケかヒラタケつヒラタケへヒラタケと
タヒラタケれとヒラタケやヒラタケつヒラタケうヒラタケとヒラタケけヒラタケれヒラタケ、革ヒラタケもえヒラタケとヒラタケ止ヒラタケ。

夏月

吉江真澄 誌

○ 橋の豆ノ象

やまとほしめ流し河邊郡木暮^{シマツ}大戸とよす山喜郷^{ヤマキ}小石川
知月^{チヅキ}流すらごとくおうひの山に橋の名をあたへて中^シかみのゆ
けの影^{アヒ}くらべて見たりと晴^{ハラ}五日^ご見ゆせらむ。

あのまことに月夜のまつも時事やうにそりあはててあらざる。

十七日夕保田^{シラタ}をもとましむれひあま松淵正治の御子^{おねがい}太^{タケ}金^{カネ}也^ハ猿^{ルリ}
園^{クモリ}路^{セミ}を横^{ヨコ}森^{スギ}妙^{タト}田^{タチ}をまわ^ハ幕^{カーテン}らわ^ハも幡^{ハタ}子^{ハタコ}明^{アハ}星^{スカイ}駒^{ホコ}形^{ハコ}社^サ祭^{マツル}
お通^{ハシ}不^{ハシ}馬^{ハシ}頭^{カミ}觀^{カミ}音^{オノ}菩薩^{ボダシ}の寺^{ハシ}、石^{ハシ}小^{ハシ}駒^{ハコ}形^{ハコ}とあた^{ハシ}はあ^{ハシ}あ^{ハシ}白^{ハシ}像^{ハシ}のモ
モ^{ハシ}年^{ハシ}祭^{ハシ}た^{ハシ}お^{ハシ}御^{ハシ}神^{ハシ}も^{ハシ}馬^{ハシ}の病^{ハシ}も^{ハシ}五^{ハシ}の調^{ハシ}も^{ハシ}う^{ハシ}人^{ハシ}給^{ハシ}え^{ハシ}り^{ハシ}み
ちの子^{ハシ}所^{ハシ}ハシ^{ハシ}も^{ハシ}事^{ハシ}も^{ハシ}護^{ハシ}さ^{ハシ}れ^{ハシ}給^{ハシ}て^{ハシ}て^{ハシ}は^{ハシ}高^{ハシ}僧^{ハシ}面^{ハシ}平^{ハシ}丁^{ハシ}女^{ハシ}群^{ハシ}
うれ田^{ハシ}を秋^{ハシ}も^{ハシ}東^{ハシ}穗^{ハシ}西^{ハシ}の貢^{ハシ}負^{ハシ}ひ^{ハシ}せ^{ハシ}こ^{ハシ}す^{ハシ}か^{ハシ}の神^{ハシ}

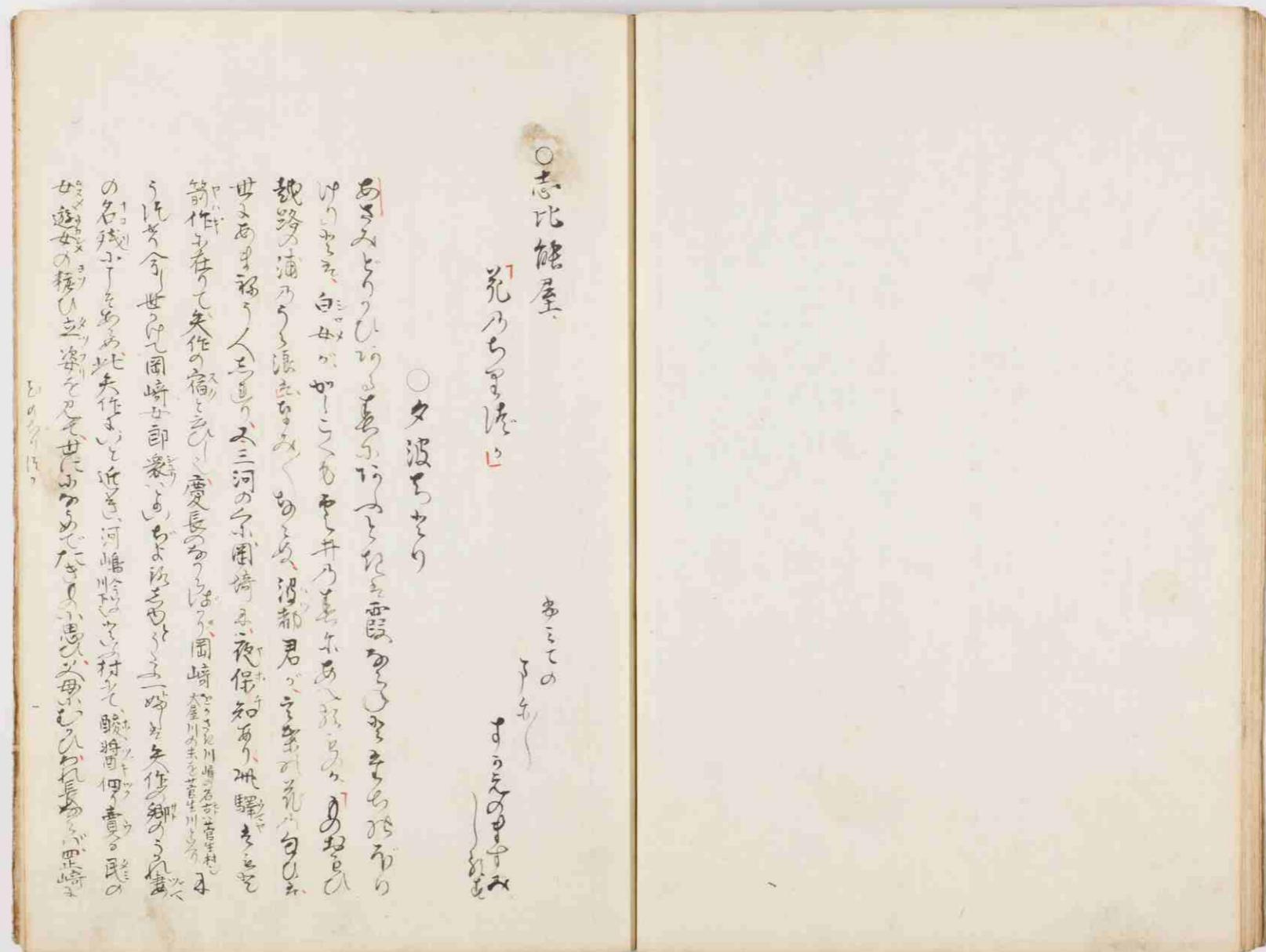
此の事は筆の山口日記を書つてある。云ひ、身駒形の社の下當りの水井山清水寺大行院光永家験者上祖を沼井七郎兵衛其と一人、多門天の木優と御遷封のとき常陸國持奉保戸野中町の沼井典膳某家本家もわづか秋田小秋田郡下飯坂村住居其村與左衛門と以群の弟、又さく竹筒井の底下に置けられた。面苦薩正觀音の像で、浮うる。地蔵小入體の觀音。坐像も、久保田市中通町の小嶋喜左衛門と肆家小屋らうどある。坐像も、大さる。鹽魚と料り、腹をくせりはる。みじんこ。まきのあく某がもしらむ。漆清りて見渡し。一オハ分の紫銅佛。正觀音のまじらし。船のうりかじて、すまざのとうげし。又金木薬師。支那から来たものせら。これかじ。もうみゆ。そのの薪され。其の後、田の道をまわる。とおなまめ小笠山を眺む。

此の蒼生式とえ、老湯種藤を終へ、血酒飲みに初苗。久早娘子田主の家を集め、身を離れて、多くは多めをやう。さうの酒宴。其の後、お茶を盛りて、お茶を飲む。盈て是。楊枝米と、お粥食。食はく。家はよろしく。新築穂酒手拳を家もよし。道々傳。堀井小源。娘子たまごのみで、小豆入り。泥菖蒲白くねじて、生じのき。ありあき芋。化菖蒲と見れ。あらはりきれ流れ。うらじとよし。江源武鑑。書。天文廿二年二月自朝鮮國白菖蒲を渡。王使を梅西軒と。同書。弘治二年十月十九日。あつて。津田入江の菖蒲。白花。美し。事かと見え。がづき。長瀬の堀。古黒沼。赤沼。ぬかるく。地動。あゆ。がれ。用。各堆。大河も堰の如く。砂と土。さう。河堤。よのう。行。沼。かう。かづ。沼。元和寶承。見る。貢。往来舟。うそと運び。し。と。其世。

底深く水廣く本長江大沼あれ長沼名残り古い野寺先の筋の後ありあり
この都の御城を守るの高塙あり是と渡避堤と今もさして昔の築城
今うそと人淺く浅香の沼ある處より生れしや度の中づきの所とも云
はるはすりてかとあやう遠近に道の立木小舟泊めらうと見えぞ
君代をうゑの讓のうゑの畔用すまへうつまくのうゑ
田畠の岸に長野と並んで也沼の至り野原から山城築て後士坊
連なる堆小櫻を多く多くよりて長野橋小路とせざむ其事の傍
前のみあらず萬松寺に近むと云ふと國の宇佐文神社
御在所も極とむべからずも根子と草のぬれ道通し法師力子川頭
人少傳と給ての輪をまじと云ふ事と譲るにゆれがまくもかく
數々春まくつるあらが事と云ふ事とまかにむきの事もをあら侍ゆる
がまゆる櫻のうねく也薪のこぐ馬五十六頭と其寺に御まきえを拂ひと見

カクシテ御金給ひよどみと云ひ法師節を挙手て不急と云ふと長引け候
あらかじめあらかじめたゞかうとあらかじめ心をうつする意を出でられ、其を重
うか御董木のこゝに種事あらうとてうとてうとてうとてうとてうとて
櫻あらかじめあらかじめ思ひ少しがんじて公の仰あらかじめあらかじめ
運べてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
脊あらかじめあらかじめ度あらかじめ度あらかじめ度あらかじめ度あらかじめ度
あらかじめあらかじめ施物も多めしと思ひ設けあらかじめあらかじめ是あらかじめ
あらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめ
眞實心手を思ひあらかじめあらかじめ世に陽のうれと云ふと云ふと
恥を覺せ給ひせよあらかじめ施物も多めあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめ
其縄手あらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめ

うゑとうゑとうゑとうゑとあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめあらかじめ



身をうり遊女とあらうびとひよすのと親もお父さんやあやぞお
あうり母もお母さんと見と自身をうかべてゆくと孝のあいとく西
がて正保慶安頃とお殿とがいと寒きタ大桶ヨリ身を失て死みをじつ
あらひまど誰と樽を川のゆづらみちうちねぬもくもく
ちすみひ襷引とせて行燈トみて戸をあらひそが裏小遊女連と號
名をあらめを二條の城山番ひ大江戸より京都小倅せうけあらそ金子
あまざきを返つてかふであらひ世都達て江戸をまわし小妻とくろ、男子、
わらうあま前妻エクハはばかが嫁をまわし川嶋の母、江戸をまわし後を川嶋氏
と一門とからじしよかくえ小書ち卷尾張國の名古屋を破る吉良風中
よみきひ廢書とくのりとありと見えとそだらうづぬ原とあまびくす
さそくく吾の廊の葉種まへと見えせむかわゆりうてねばぬ
出羽國山本郡神町の遊女 上へ見ても益見ても残るみとくも珍也

○あらうのひめ
すらあらうめち秋田郡のまゐぢまゐぐれ 定め名取漫釣手掛キトト
とくうえ呂丸が作りとぞくれ方とくも甚事とくもくわめくわく

近きひうの事あるも秋田久保田あは十軒町と外夜久人等をうら
木氏門小嬰兒の泣變りとくうへて身をもと戸口一郎と燈と身を起
ゆゑの衣の綿あつたなを包て捨てひのあらの親心に誰とおもひて寒
甚に雪不書とは乳布の満の乳とせん事と御乳を乞ひの流れて夜宿
て待て乳をひぬとおもひて乳を乞ひの乳を乞ひの流れて夜宿
ておひぬ、八木氏も貧乏で、地丁女十三歳うり時町西勝寺の門前日お寺
等の店をす、舖焼餅と名と申す子の賣賣の不正、短正麿女と云ふ者、おもひれ
是實事と大江戸笠森神園子うる如小群れ寄るも多ひえの名を示すとあひた
おもひぬとくもく井井娘子に懸想せぬとおもひて折内某の上あめあひてお

親の家をひやで、毒モトメで本妻を殺す。まぶたをちりむかへ
 春みのく水野氏某、工事モトメをあたとさす折内家をもつてぐふを
 花かじる者、速ひ地爐モトメを燃へしもひわれとせひまで湯よどむをくほ日
 錄モトメがく小折内、病氣モトメをもひゆるがれ、子モトメは郷より來る折内妻、久助
 奴モトメを思ひ折内モトメの種男モトメをもひ、平福モトメをもひれ今おもつて折内モトメの種男
 太郎モトメが本妻モトメをもひ、人をもせつ見ぬモトメを度モトメおきくちのと
 水野モトメがく太郎モトメ、久助モトメも大江戸モトメ小住モトメ、元子モトメは閑思恭モトメをせひるを
 讀モトメめうとあれ心モトメをもひ、さうあると、手もくまじつひのびら
 もせりや、花のうゑに書モトメも、見抜モトメいのうの書モトメをせひるを
 とくらうと、花のうゑに書モトメをせひるを、せのねがをせひるを御モトメくわく書モトメを
 ひび金モトメをもひくをせひるを、秋田モトメの東モトメ、月代モトメをせひるを、久助モトメが
 三日モトメをもひく、兩皆モトメをもひて、久助モトメを夫モトメとせひして、夫モトメをもひして、
 三日モトメをもひく。

八木久助モトメがくに志免モトメ、志免モトメへ遙モトメ大葬モトメへも、そくあく
 きりあらわせモトメがくに、さうあらわせモトメへも、海モトメをもひて、
 積モトメ。

鳥部モトメ水モトメをもひりとひりと消モトメえなまづてひひきあらわせモトメ
 せひくらわせモトメをあらわせモトメ。さうあらわせモトメ、西勝寺モトメをもひく
 男の墓モトメの前モトメへあらわせモトメ。

さうあらわせモトメへあらわせモトメへやうまの弟モトメをもひく、
 とくねうけのがむ志免モトメ、志免モトメへもひく、由理郡モトメへもひく
 をもひく、今も加賀モトメのま、馬モトメをもひるもひまもひて、志免モトメへもひく
 温モトメをもひく、ひき力モトメへす錢モトメをひく、まもひりえも事モトメのま
 事モトメへもひく、ひき力モトメへす錢モトメをひく、まもひりえも事モトメのま

さうあらわせモトメへあらわせモトメと世モトメの中モトメへ一モトメ、半モトメをわづみ
 さうあらわせモトメへあらわせモトメと、志免モトメへもひく、西勝寺モトメへもひく、歌モトメを多くける

破損あり

とおれを豈ぞやまへんかとあきらめ事にて。

○あそく川

あそく川の流き、こみせのまへんすう色を記つて有。あそく川とし
よどぎの三河をさうじの事小あるもあり。松平相模守治道院
屋の室うち松平陸奥守重村親臣の女がく、内室近衛殿の妻養女かれ。
和歌もあふ頃から端正堂にせよと嫁姻の初のう中しきがせり
娘ひが治道の妻、因幡國へて嫁とれど、妻をそよとし給へと玄主のび
海へ進むるどとお事と、ゆゆくとも下向給ひけり、一とせ内室至篠
まつ麗子中絶二度のもとすましまをあすめり。因みのいふのくず金持
あくとくあらば母君おとづれことやてめへはれ女もひ中に容色美貌
よしと傳ひ出で麗子中絶をばれ治道きみはめきもの色うそうせり
日歩をひ月歩をひて篠山坐すも内室康一翁に会す。君子又言ふ坐す

とあく川をわすれぬ内室せはまく身を休めし草の葉がうみ
声をうかがふお別れに水腫をあくとく大の腫き身あくく
わが爲あつて寛政四年の夏、身中うかく時草の下す
むをひもひつたまひとて手をひきとめり本もくから多うひ
身をひきとめくとて去難へ給ひてうなえり。

○あられのむき

片あ譯あ水深川の土橋を半弓を賣うれ女ぢ縁へまく身を
暇をひき諸國行脚を出でてす。願ひ一とくあまうめくまほひとく身を
給金を給ひ願ひとくとまくとせばとれくとれくとれくとれくと
あくとく神とく人神所にし。

やうそ又ゆくの事あつてひの土をひくひの身を
教ます。身は其事身は其事をあけま殊勝かと思ふおうと身を

やうと新吉原へ下されど事皆を生涯の如くありと大國越前守殿
時奉行の如く奴の遊女もいれ
ほんとうに母屋のすなづらみのまでいふまでも
財物を被ひず駆逐せられ、それより隨一遊女吉原へ下りて事も
三年後りに定むれどもまだまづら。

○上津野の花

夜與比はうり、秋田郡十二裏郷小来て吹谷民部と不西日ありつたまひ
見事の花見風流日か、鹿角郡三ヶ所の折橋、開いの草木などもけぎだそ
もふ雪をあわせつけたり、花も萬千、三哲山の麓ありとむらむらのあ
のめ跡とて隣さふねはき跡つけて手の残て、自由、弓の事保のことをせば、
二三戸家と残れを今、人ふ十人、一派りて其まとも難い住處となり、村免折橋と
よく言ひ地ぞ、金の闇屋もすて折橋開いてその名を豈やかすかとて、物と通橋を半道
花もすまく折橋のそらあひしとゆーと渡れ谷のうきひも
ゆう持えけいどもの船もおもく、澤尻材のうみ、鐵のうみと引と
り、心病山里である。さて又秋田氏の舊臣朝光と攻めし、一揆の大將も
浅利伯耆同法久入道同藤馬先花園因幡、三室、民部曲端源助澤尻冬太郎
別所三郎ととく人の名も見えず、別所と云ふもと近く米代川を隔てたる名也

天の井澤尾太郎さん小住す。けし大持長峯龍森^{タケシマ}と遙近の山に岩の
孔うす焉とす。石事く歌ふ風冰えむ村中ハシマかあ霞合^{カスハグ}に神明のやううなす
うのやうか北杜の木むすびてす。まみへ櫻の梢も叶枝もす。海シマもあり。
三三あうす向ひせぬ。おのれこもす。さくらの花乃ちくゆ
馬アラシむきよ。上よ稻荷のやう。鳥夷トリイ。鳥居のあれあひう見えす。堺川をもす。みの
浦を渡れ。陸奥國鹿角郡土深井と。村小關コトノカミ。本飛貝ヒタチガイ。外もす。みのうい。
東山溪を掘れ。うせ貞は。ぬづか。うじ見ウジミも出。中溝目多。み員^{ミン}。事無シム。あら
そ溝見クソミも。計言カウガク。此名原とある。うきの良ウキノヨシ。心ハコも。く文フニ。也ハシ。も。あ
萬書^{ミツシナシ}。身ヒメひが。そも。ひ。多。鳥居^{トリイ}。足す。見る。鳥居トリイ。也ハシ。も。あ
う。も。御れ。め。さ。て。く。海シマ。人ヒト。も。か。こと。ひ。も。ち。あ。の。や。う。
か。放ハラシ。よ。山路ヤマシナリ。り。や。と。小。十。丈。ま。山路ヤマシナリ。坂路ハラシ。西。尾澤尾太郎
東。アリ。細道口。細道口。米代川を渡れ。花輪鄉ハナレ。北。下。松葉

開セ哉。そ神田村。米代川を渡り。錦木龜と。跡ハシマ。毛馬内郷モハタカミ。す。南シタマ。北ハマシタマ
尾澤の敷塲ハシマ。入。毛馬内郷。出。西路。十。字。街。小。所。す。永慶軍記。跡代城主太高
傳。信門尉ヒサムイチヨウ。本郷公政。旗。押。さ。防。き。げ。城。城。主。全。引。事。不。叶。直。不。白。根。錦。裏。
西。道。通。も。走。銅。洞。引。す。常。陸。今。せ。ひ。大。將。と。組。む。心。か。鞭。小。鑑。合。追。望。衣。冠。
守。す。北。彈。正。相。射。坂。を。ぬ。か。常。陸。今。金。鑑。合。合。ば。思。ひ。ほ。た。敵。れ。後。小。常。陸。今。
突。爲。防。す。と。そ。世。十。丈。ま。山。路。を。建。對。坂。を。む。と。可。見。と。そ。脚。比。馬。年。西。道。出。
内。御。手。臺。無。小。屋。と。見。鳥。就。里。と。山。里。を。經。と。追。子。坂。と。う。す。坂。を。見。
そ。こ。と。か。と。え。ひ。ば。そ。の。と。と。お。の。と。ひ。の。と。ひ。の。と。童。ま。あ。ひ。ア。ま。い。
美。小。狹。布。郡。少。そ。お。が。少。不。道。と。と。母。の。お。お。告。論。で。だ。す。お。の。の。子。う。わ。ま。
あ。ち。れ。ま。あ。め。り。夜。と。と。世。勞。ひ。り。げ。わ。と。と。夜。を。ま。み。と。と。故。の。旅。表。
の。旅。ね。と。と。底。風。よ。坂。中。子。物。を。め。い。て。子。う。わ。の。絵。つ。と。と。地。國。中。と。峰。望。

此坂や達對坂のむし西道口より一村で米代川に綱電橋にて西道山を越え
て本細道毛布の細道も立事跡と字音小山のまゝ花輪の方から又東へ
時も半弓の花輪の花すみ草すみ草すみ草すみ草すみ草すみ草すみ草すみ
かく花輪小毛山小田堀氏の家す既す

幸福荷をもあまと流れ、白洲、姐とのうつて、田川引す。橋をへ往來せり。ともく

福士川幸福局の邊に河井の宿の水を賣り、福井假屋にて布施にて
草の根を採る事万葉集歌、布施の水を摸丁横町袋町のど引付傳で
水を賣る事、洲里の篠根深色も青根深色も紅色も皆水に染め、其の色を
洲里に賣る事とす。五月より八月まで賣本家、音町、名古屋、醸醫（天津子）、味醸酒（味醸酒）
味乳醸（味乳醸）も出でむ。その他の施人、門外小津、高木、金森、色山、高木、安田、吉井
金火を賣る事、華を紹す事、進む事、今ももはうを賣る事、其の外に、
味醸の如きが少く、多くは實物の味を賣る事、味醸を造賣する事、それと並んで、味乳
別れ三戸ありて、より以甜乳醸也。此布名河の水をくみて、之をてそぞれ名す。
ヨリシ花輪と名也。多し重之歌、小武隈の水を賣る事、松原と云ふ事、
あさみと云ふ事、之をて、之を賣る事、其の外毛馬、小野、ひ、咲花輪、御山、出羽國
山本郡鹿之里、近見の小塙村ありて、みちのくの津軽椿川の水、大間越、白神山、太文字
獻の如きが花輪庄、其塙也。字あまほねたる姓も塙也。花輪、塙也事也。

虫食いあり

波太和山の岬より出まみて云ひて今皇長を事に申回浦同磯同水回ゆも傷
了南部と申南部由来より也遷り給ひみ候て字音以ひ事す今もモアニミ斐
チモ姓の如シトモトモモシモムルシテミアシ身延山も房那布山と申シモサシ
シテモテ袖立裏れそば多喜山と申シモモモモモモモモモモモモモモ
キモ御者ぐみはまつと雨衣者も申シモモモモモモモモモモモモモモモ
飽田の今申郷三代實錄畠元慶二年條小七月云モ秋田河南拒賊於河北天
秋城下賊地者上津野大内相淵野代河北鞍本方口大河堤姫刀方上焼園
十三村也云ヒと見申テ、南郡鹿角郡花輪郡鎮守御神幸稻荷と申モテ御事の
山脚ヨリセハ大江戸サニ切通の坂の上ヒ幸稻荷の馬と云ヒて時島タク名トシ
タクモ申ヌ其御跡也清創シヤウ神御名もあリ且高嶽宗俊天皇五宮親王
宮モモミタモ給ひ申ムスカタムト御ひテガタス山樹も申モ御事錦木山觀音寺
の縁起にて大化寺僧の事云一卷あリもの多く傳へられどさみだひあれど其時

おとものむらがみ

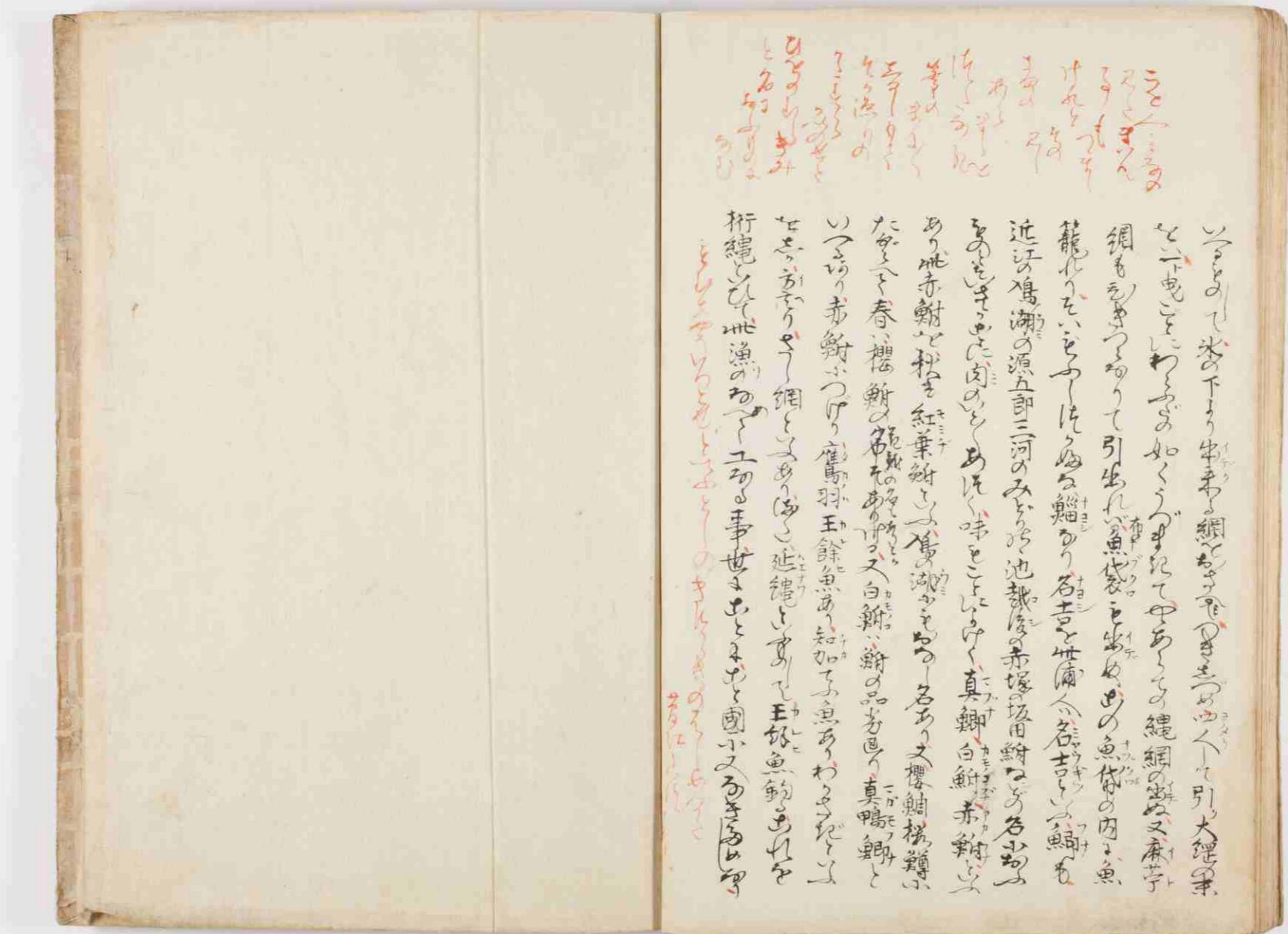
一ノセの冬八龍湖の氷下の網曳見てもと松田郡徐田郷主雪
出で新闘浦とほしの大久保濱の沖遠く島礁回とも申シ石畳
雪立カキモトボクモリテその漁を恩リテスニシ月十八日
今戸浦へ入て也シモトモトモトモトモトモトモトモトモトモ
のけらめ室もモモモモモモモモモモモモモモモモモ
カモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
浦モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
どもひ通計跡も雄鹿天王浦も三百町あらう氷の上と申シ今戸
浦モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
冬寒モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
カモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
として復来セモミタカモカモカモ信濃國の諏訪の鶴湖の氷去通

虫食いあり

路あらまづかく湖水と重ね米荷を方見せた馬引馬
 うる来て李上をよどみあわせもぬ清き雪に冬、年がすりだ
 馬をも米荷かで炭俵カタシマに付来て雪渡つて、雪吹立て、
 えの木と木友馬キウマが角ツバて是をもてて、事は
 ええぞ令オーリるがと風を荷をあひの藤フジをやわふるを大を
 吹立て、傍ヨリ炭カタうつし炭俵カタシマがこう火ヒとて、居ゆひ是よだすも、こち
 もおれえも眼メイのきくぬれ夜ヨク暗アカ三尺ミサカヨリの原ハラ水ミズとも夜ヨク
 ごろ火ヒとて、山炭ヤマカタをねうて、李上リツカタをなはし、遣スルたまつたと
 帯ヒ國シキニ小又コトノホのうと其冲カタマリ泊モリせし跡シテと見ミる、雷スリバチ盈ヨリの音ヒムカで、
 中ミナミにさめうもと守モリする氷ヒガ厚ヒヂタ一尺ヒヂタ半ハーフもあらじと、そのれど、
 も着マサニへを事モノの語カタの語カタぬかく、沖カタマリを禁シテりて久ヒサシ也タ。

四方八方ヨモヤで見ミけび、今アキと遠近エヌカ立タむがぬ、第ハシよ老網子シロカニシ一組ヒツ、
 客シテて、車カツ半力ハーフとて柯カキのとせらが鉏スヰをせらひそ、雪スノふあらひそ、
 氷ヒガうせら大オホ、宍ミツカをまつ極カタマリぬ、是をこみ宍ミツカ、ヒ人ヒト左シタ右モリ別ヘビ。
 小宍ミツカとくヒくモリ、左手シタ握ハサウて、其手シタは會モリせ宍ミツカとて又大オホに振
 游ハシマリて、細スリ毛モ繩ツイのあて、細スリ緒モ附タマ添タマて、此シ緒モの端ヒタチは浮ハラハラとすシテ。其
 の上アベは木キの竿ハシマリたすくハシマリるそモの棹ハシマリはをの漂ハラハラとて、こみ宍ミツカ
 うモリ、シタかうして小宍ミツカを左右エヌカ通スルて、小宍ミツカより小鍵シモツをす
 そモリ、シタ下シタとすがひそ、以シテ袖スリ繩ツイを引ハサウて、引ハサウて、又モリ小宍ミツカを
 うちモリ十ヒヂタあしモリじとうヒキて、引ハサウて、大オホ繩ツイの端ヒタチ、引ハサウて、モリひらひら
 の如シテ大オホ繩ツイ子チ繩ツイうら掛ハシマリて、後モリ去スル左シタ四シテと引ハサウて、残リまつて、丁シテ木キ

虫食いあり



破損あり

